

「会員短信 24」

「終の棲家」

青木輝子

私は、今年で七回目の干支です。七十五歳で終の棲家の老人ホームに入居して九年になります。部屋にはミニキッチン、ダイニング、浴室があり、ボケ防止のために自炊しております。

入居者一三〇名の内、一〇〇名は寡婦またはシングルの女性です。ここでは年齢差があるだけで、七十代から九十代の皆さんは、すでに終活を済ませ、達観した明るい方ばかりです。

私は群れるのは好きではありませんが、ホームには大風呂があり、唯一、社交の場、情報を得る場になっています。裸の付き合いで十分から十五分、賑やかに様々な話題を大声で交わしております。それというのも難聴の方が多く、だんだん大声になってしまいます。齢だけは、その齢になってみないと理解できません。

先輩方の老いていく姿を参考に、いずれ行く道、明日は我が身と思い努力しております。

終の棲家、老人ホームという言葉にマイナスのイメージだったのですが、住めば都、実際に身を置いてみると安心、安全、快適で満足しております。

目覚めてもご用済みの身日向ぼこ

お断り出来ない加齢うそ寒し

そこのけそこのけ生身魂用優先席

来年もこの世の予定日記買う

夏瘦のリバウンドする豊の秋